

間隙かんげきをついて門司城を押さえ、叛服定まらない豊筑の国人と毛利氏との繋りつなを断ち切ろうとした。豊後勢は、この年九月ごろまでに、香春岳城（杉生緒）・花尾城（麻生隆実）・松山城（杉隆哉）等を攻略し、門司城攻めにかかった。

### 大友方敗軍

門司城攻囲軍は、十月末まで数回の合戦に成果なく、十一月五日、半年以上の長陣に疲れて撤退を決し、山を下り、赤坂・小倉を経由して貫山越えて彦山下を通り日田へ到着した。毛利水軍が仲津郡辺で道待ちしていると情報があったため、宇佐郡衆まで日田へ随従した。

国東の田原親宏勢は貫山を越えたのち二老の本隊と分かれて、黒田原・天生田・国分寺原を通って国東へ帰ったため、途中、毛利方の杉隆哉・野島・来島・浦兵部等の兵に追撃されて大痛手を被った。

この大敗にショックを受けた大友義鎮は毛利水軍の襲来を恐れて、臼杵の居城を大修築し、三十二歳の若さで出家して宗麟と号した。

### 三 松山城の攻防戦

門司城の敗戦から半年後の永祿五年（一五六二）六月、大友宗麟は、門司城奪還のために、再度大軍を豊前へ送り込んだ。しかし、今度は、菊田の松山城（標高二八〇）攻略が中心となった。松山城は、歴代の大内家守護代杉氏の居城であったといわれ、このころ、大友氏から離反した杉因幡守隆哉と杉重輔の子松千代丸（のち重良）がいたが、天野隆重を城将として送り込み籠城体制を固めていた。この城は東と北が海に面した崖で、南と西は深い湿地となっていたから、小さいながら、攻め



小倉側より見た松山城跡

るに難しい城であったらしい。

門司城では、大友方の猛将戸次鑑連や吉弘鑑理が攻撃を懸けて、大内一族の冷泉元豊以下の部将を討ち取る戦果を挙げたが散発に終わった。

### 高橋鑑種の変心

松山城で小競り合いがつづいている間も、毛利氏から豊筑の国人たちへの調略は進められ、永祿五年の暮れには、大友宗麟の信頼が厚かった太宰府宝満城督高橋三河守鑑種が寝返った。これによって、毛利方は門司氏―麻生氏―宗像氏―杉豊後守連緒―秋月種実―高橋鑑種―筑紫惟門と博多・太宰府への通路を容易にした（荒木清一『毛利氏の北九州経略と』、国人領土の動向『九州史学九八号』）。

晩年を小倉城で過ごすことになる高橋鑑種は、大友一族一万田氏の生まれで、大友義鑑のとき、筑前の名家大蔵一族の高橋家を嗣ぎ、肥後の

菊池義武討伐・小原鑑元討滅に大功を挙げ、認められるところとなり、筑前宝満岳城督を命じられていた。高橋鑑種が宗麟を裏切った原因については、このころ、筑前の国人への調略を命じられて、これを進めたいところ、宗麟が毛利氏と和睦してしまったので、鑑種は面目を失い、宗麟の矛盾したやり方に不信感を抱いたとか、鑑種の兄一万田鑑相が謀反の疑いをかけられ、親類の服部・宗像氏ともども討伐されたこと、それが宗麟の一万田鑑相の美貌の妻への横恋慕に原因していたことなどがいわれている。

最近では、高橋鑑種が、このころ、毛利氏に筑前西部六郡の支配を認めさせようとしていること、独立大名化への野心〔荒木清一「前掲論文」や、宗麟が見殺しにした弟大内義長時代の鑑種の役割に注目して説明しようとする説〔大分県史「中世篇Ⅲ」〕が出ています。毛利方では、高橋鑑種は大酒飲みの豪傑で、大友勢を物ともせず、神出鬼没の作戦で敵を蹴散らしたという評判が定着していた。



大友宗麟の花押



高橋鑑種の花押

### 毛利・大友の和議

毛利・大友両家の対立は、永祿七年正月、公方足利義輝が派遣した聖護院道増らによる長い調停作業がやっと実まって講和にこぎつけた。

その条件は、①門司城と規矩一郡を毛利方が支配する。②松山城・香春岳城を破却して大友方へ渡す。③高橋鑑種をはじめとする牢人を大友氏の家臣とし、所領を没収したり、誅伐したりしない。④小早川秀包（実は元就の子）に宗麟の娘を娶めとせる、という内容であった。

しかし、この和平は長くつづかなかつた。香春岳城の破却と引き渡しが遅れ、毛利氏得意の調略が、豊筑の国人へひそかにつづいていたからである。大友宗麟の知恵袋といわれた家老の吉岡宗（長増）らは、「毛利氏が調略をやめないならば、大友方も、防長の旧大内家の人々に蜂起するよう調略しますよ」と抗議している。このころ、毛利元就は苦勞して出雲白鹿城（松江市）を攻略し、ついで、尼子義久の籠る富田月山城を攻めて、永祿九年十一月、これを降し、義久を捕虜とした。

北口の憂うれいを除いた毛利元就は下口（九州）へ露骨に乗り出し、高橋鑑種を宝満山に拳兵させて、立花城の立花鑑載（あはとく）に調略を行わせて、これをも拳兵させたため、永祿十一年九月から翌十二年十月まで、再び毛利・大友両家の大戦争が始まる。

### 四 大坂山の戦いと三岳の戦い

永祿七年（一五六四）の和平協定で、毛利氏が豊筑から手をひいて、出雲の白鹿城から富田月山城へ尼子義久を追いつめている間、国人たちは大友氏に降礼をとって、隠忍自重していた。